企画特別展関連イベント・ワークショップの実践と課題
～「薩摩焼でティーパーティー」を中心に～

樫　木　芽　衣

はじめに

平成30年度，明治維新150周年を記念して開催した企画特別展「華麗なる薩摩焼―万国博覧会の時代のきらめき―」は，国内約200点，海外約50点の薩摩焼が一堂に会する，大規模な薩摩焼の展覧会で，ニコライ２世に贈られた薩摩焼が日本に初めて里帰りする点でも注目を集めた。これに関連し，記念講演会，トークショー，シンポジウム，ワークショップ等のイベントを展開した。

本論は，黎明館初の取り組みである企画特別展関連ワークショップのひとつ「薩摩焼でティーパーティー　器とお菓子でつくる私の世界」の概要を報告するものである。

ここでは，体験による生涯学習のアプローチを考えるとともに，黎明館主催のイベントでは使用される機会が少なかった茶室の活用について考察を加える。

第1章　概要と目的

①概　要

日　　時　2019年1月6日　日曜日　13：30～16：30

場　　所　黎明館茶室・楠芳亭

講　　師　鹿児島大学教育学部　下原　美保　教授

参 加 者　一般（10代2名，20代0名，30代1名，40代4名，50代6名，60代3名，70代3名，80代1名　計20名）

参 加 費　一人700円（お抹茶・お菓子代含む）

申込方法　電話受付のみ　先着順

概　　要　薩摩焼の茶碗を選び，白い皿の上でお菓子を使って自分の世界を表現する。完成したあとはお互いの作品を鑑賞し，抹茶を点て，お菓子と一緒にいただく。

②目　的

新しい視点から知的好奇心への働きかけを試みる。今回の目的は以下の2点である。1点目は，室礼における表現の自由にヒントを得て，お茶を楽しみ味わうだけではなく，和菓子を使って皿を装飾することにより，自己表現することの面白さを体験することである。2点目は，茶道の楽しみ方を講じ，参加者同士が，互いに装飾した皿を鑑賞し合い，日本の伝統文化への関心を高めることである。

第２章　運営の準備と試作

事前準備は以下の通りにすすめた。

（１）チラシ作り

チラシは，「和モダン」をテーマに設定し，古くから親しまれる伝統的文様を参考にしながら，茶道という日本文化と現代の感覚に寄り添うイメージで制作した。さらに，鹿児島の老舗菓子店「明石屋」の和菓子を用いた表現作品を載せ，今回のワークショップのイメージを膨らませた（資料1）。

▲資料１　チラシデザイン

（２）材料の準備

明石屋の和菓子を基本として，アラザンやチョコペンなどの製菓材料の他，色や形の多様性を生み出すため，市販の駄菓子や洋菓子も用意する。

（３）実践前の試作と打ち合わせ

①第１回打ち合わせ（８月２６日）

１度目の打ち合わせでは，茶室のどの部屋をどのように活用するかを確認する他，次のことが確定した。

・お菓子の他に，オーナメントなどを用意

自分の世界を表現するため，お菓子の他に，造花や小さな人形，おもちゃなど，様々な材料の準備をする。

・茶道の基本を学ぶ時間を設ける

茶道の未経験者も参加するため，最初に，茶道の基本的な考え方や作法について講義を行う。そのあと，今回のワークショップの趣旨を伝えるため，見本として，室礼を披露し，茶道のなかに存在しうる自由表現について講義をする。

②第２回打ち合わせ（９月13日）

今回は，明石屋の今月のお菓子（長月）より，「白露」と「秋の野」，それから贈答用の「豊の秋」，装飾用に，金平糖と飴を用いて試作した。発見したことは，次の通りである。

・季節の和菓子は装飾用の菓子と彩度の観点から符合しない場合があるため，季節の和菓子と装飾用の菓子は見た目のバランスを見て考える必要があること

・27cmの丸皿は，金平糖などの小さい菓子ばかりだと持てあましてしまい，さらに，皿の形状に従い，飴などが円を形成してしまうなどの様子から，作業が難しいこと

・皿の上にも千代紙などのシートを使い，表現の幅を広げられること

・和菓子の色も考慮して装飾用の材料を用意する

・皿の大きさや形でも様々な表現ができるため，大きい皿がよいとは限らないこと

③第３回目打ち合わせ（11月30日）

２回目の試作と打ち合わせを行った。今回は鹿児島大学の院生も加わり，鹿児島大学の学生の作品を一緒に鑑賞するなどした。その結果，より多くの人の作品を見ることで様々なアイディアやコンセプトを発見できることが分かった。ワークショップの参加者にも，想像をかきたてるアプローチができると考え，当日の内容説明と鑑賞会の時間を多めにとることにした。

（５）室礼

担当学芸員が本館の茶室である楠芳亭の室礼を手がけることにした。

第３章　実践の様子

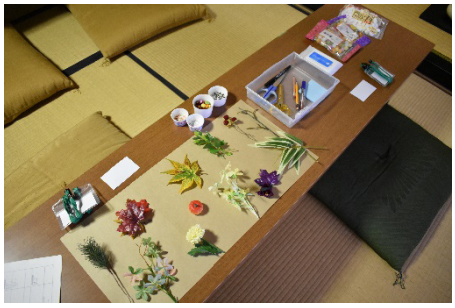
（１）参加者

電話申込で，定員を１５名と定めたが，リーフレットを配った日に初めの申込があった。展覧会に関連するワークショップが初めての試みであったため，あえて募集期間を設けなかったが，その後，10月中に，すでに１３名の申込を受けた。リーフレットの配布を始めた当初から，多くの申し込みがあり，また，問い合わせ等も多かったため，講師に相談し，２０名の参加を受け入れた。

準備

前日は会場の設営と使う材料や道具の確認を行った。一日のスケジュールをシミュレーションしながら，２０名とスタッフが動き回れる導線を考えるなどして，設営にあたった。

お菓子は，様々な色を選べるようにし，当日，小皿に分けるなどして，試作の経験を生かしながら，制作しやすい会場作りを目指した（図1，2）。



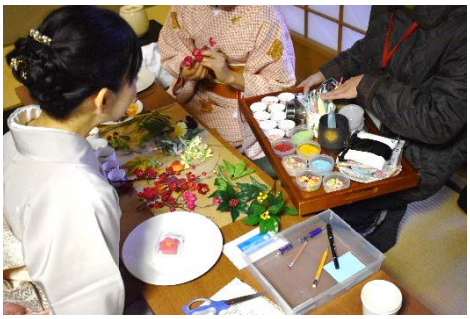
▲図１　机ごとに材料を並べていく

▲図２　製菓材料

【菓　　子】ポップコーン，ゼリービーンズ，金平糖，フルーツマシュマロ，カラースプレー，チョコペン，トッピングシュガー，アラザンなどの製菓材料

【装飾材料】折り紙，画用紙，クラフトパンチ，造花

量の少ないものや，こぼれそうなカラースプレーなどは，制作中に，机を周りながら参加者に渡すようにした。たくさんの中から，自分の表現に合うものを選ぶのは，なかなか難しいが，学生と話をしながら，楽しんで選ぶ姿があった（図3，4）。



▲図３　製菓材料を選ぶ参加者

▲図４　材料を自分の作品に足していく

（３）進行・制作

ワークショップのタイムスケジュールは，以下の通りである。

13：30 ～ 14：05	担当学芸員と講師によるご挨拶と概要説明 講師による講話（茶の湯とやきもの，室礼と表現，日本文化の型と創造性，ワークショップの目的と内容，タイムスケジュール，学生の作品紹介） 担当学芸員による講話（薩摩焼の歴史・室礼の披露）
14：05 ～ 15：15	作品制作　（和菓子を用いた飾り付けとタイトル・コンセプトの説明）
15：15 ～ 15：45	鑑賞会のための撮影
15：45 ～ 16：30	ティーパーティー 鑑賞会・アンケート記入

①講師による講話

講師による講話では，茶道の歴史や学生の手による作品の紹介をした。茶の湯とやきもの，室礼と表現，日本文化の型と創造性，ワークショップの目的と内容，タイムスケジュール，学生の作品などが紹介された（図5）。紹介された作品は，講師や鹿児島大学の学生によるもので，粉砂糖を雪に見立てる，敢えてお菓子を隠すなどの趣向を凝らした様々な表現方法が提案された。作品には，タイトルやどんなことを考えながら作ったかなどのコンセプトが付箋に記されていた。

コンセプトに漢詩を書いた中国人留学生３名が中国語による漢詩の音読を披露する場面もあり，国際交流を楽しんだ（図6）。

▲図５　説明の様子

▲図６　漢詩を中国語で読む留学生

②室礼の披露

講師の講話を引き継いで，担当学芸員による薩摩焼の歴史と室礼の披露があった。室礼では，四畳半の部屋に，薩摩焼と外国の香水を合わせるなど，従来の茶室を基調としながら，随所にモ

ダンを取り入れた現代的な茶室となった（図7）。

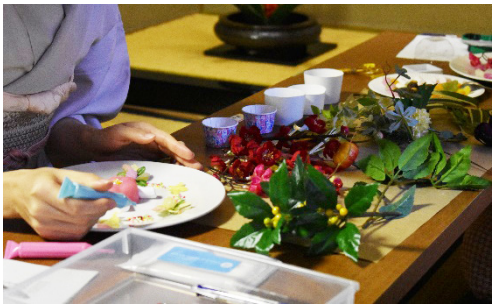
▲図７　担当による室礼　様々な器が並ぶ

室礼で，茶道における表現の自由度を体感し，参加者はそれぞれ，好きな薩摩焼の茶碗とお菓子（生菓子）を選んでから制作に取りかかった（図8）。

▲図８　器とお菓子を選ぶ参加者

③制作

造花を仮置きしたり，紙を切って乗せたりなど，試行錯誤しながら，また，同じ机についた他の参加者と話しながら，自分の表現を楽しんだ（図9，10）。

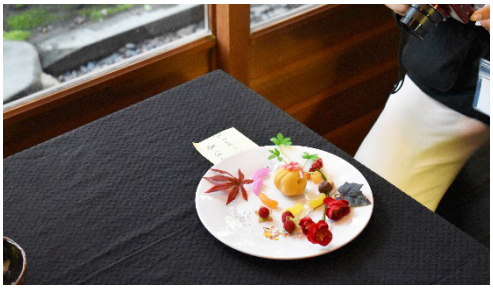


▲図９　様々な材料から，それぞれ選んで自己表現を完成させていく

▲図10　完成した作品

（4）作品鑑賞について

他の参加者と作品を見ながら話をする時間もあったが，最後にはプロジェクターを用いたスライドショーで，作品のコンセプトとともに写した写真を全員で鑑賞した（図11, 12）。歓声や,「綺麗」「面白い」という感想があちこちで聞かれた。そんな方法もあったのか，と発見する参加者もあった。作品を食べながら鑑賞するという時間は，黎明館でも茶室でなければ難しい鑑賞方法である。



▲図11　鑑賞会のための写真撮影

▲図12　鑑賞会の様子

第４章　ふりかえり・今後の課題

（1）アンケートの結果

アンケート結果は以下の通り。感想などは，掲載許可をいただいたもののみを抜粋した。

①満足度調査

項目	回答数	割合（100%）
満足	14	70%
やや満足	5	25%
どちらともいえない	1	5%
やや不満	0	0%
不満	0	0%

②印象や講話の感想

・お茶室の遊び心ある室礼がすばらしかった。（50代女性）

・室礼を自由に楽しんでもよいという事に心惹かれました。お茶室の空間自体が美しく，感動しました。(30代女性)
・お茶をしておりますが型にはまった事しかしてなくて，思うように色々な事をして良いのだと目からうろこでした。(50代女性)
・お茶席のかけじくの説明など（50代女性）
・大変勉強になりました。自分の胸のうちにあったイメージをうまく表現しようと思いましたが実際にやってみると難しく、あまりいいものができなかったのが残念ですが，新年から学生の方々もがんばっておられ，いい経験になりました。(40代男性)
・白い皿の中にお菓子を配して自分の世界観をつくるというワークショップの発想におどろきました。(50代女性)
・禅の世界に究極を求める茶の湯の世界と今までぼんやりと思い感じていましたが，すべての世界は自然の移ろい，人の為せる技すべてが相まって成り立つものとあらためて思いました。(60代女性)
・白薩摩についてくわしく知ることができ，有意義で心おどるワークショップでした。とてもいい機会を与えてくださったことに感謝しています。(70代女性)
・わかり易い薩摩焼とお茶の歴史，豊かな茶室のあつらえを見て，すっかり心が豊かになりました。また知らない人ばかりの中でそれぞれの感性も感じ，とても満足しています。ありがとうございました。(40代女性)
・薩摩焼の誕生から世界に広まるまでの様々なここでしか耳にできないようなお話を聞くことができてよかったです。別室の室礼や生け花・掛け軸も素敵でした。(10代女性)
・薩摩焼の歴史の深さをあらためて感動しました。(70代女性)
・すべてがわかりやすく，丁寧な語り口で印象に残りました。深港先生の世界観，下原先生のセンス，学生さんの一生懸命さに感謝です。(50代女性)

③参加のきっかけ

・茶の湯に関係することだったので（50代女性）
・さつまやきのうつわに親しみたかったため（50代女性）
・薩摩焼に関心があるので，少しでもワークショップなどに参加してみたいと思いました。(40代男性)
・お茶や和菓子に興味があったため（30代女性）
・楽しそうだと思ったし，お茶室を拝見できるいい機会だと思ったから（50代女性）
・華麗なる薩摩焼の講座，ワークショップ，時間の許す限り参加しようと思っています。(60代女性)
・ティーパーティーってどんな内容なのかと胸おどる思いで本日を楽しみにしていました。(70代女性)
・もともと茶道に興味があり，お茶をたてて飲むことも多いのですが，お皿の中を自分でデザインしてお茶を頂くという催し物を母から聞き参加しました。(10代女性)

・娘に参加をすすめられて来ましたが，本当によかった。(70代女性)

・ティータイムが大好きなのでぜひ参加したいでした。日本文化にも興味があります。(50代女性)

④不便に感じたこと

・お茶室が分かりませんので，ちょっと不安でした。(70代女性)

（２）周知と宣伝

リーフレット，ポスターに掲載するほか，専用のチラシを作り，博物館や教育機関に発送した。リーフレットとポスターに掲載したものは詳細を省き，日時や対象参加者などの情報にしぼったが，専用のチラシの発送前に申込の電話が多く寄せられた。

（３）茶室の活用

30年度（4月～12月）の使用状況は以下の通りであった。

月	使用用途：茶会（件）	使用用途：その他（件）	計（件）
4月	4	2	6
5月	4	0	4
6月	5	0	5
7月	6	1	7
8月	1	2	3
9月	6	1	7
10月	4	1	5
11月	5	0	5
12月	5	2	7
計（件）	40	9	49

茶室の利用における現状は，茶室利用の申し込み状況から見ると，本来の目的である茶会，また結婚式の前撮りなどが主な使用用途である。茶会以外では，非定期で利用されており，頻度も低い。

黎明館が主催するイベントで使われることはほとんどなく，今回の参加者にも，場所が分からなかった方が少なからずいた。しかし，今回のワークショップで，茶室だからこそできる鑑賞の仕方や，講堂や講座室と違った，通常よりも近い講師との距離があることが分かった。人数も，２０名ほどなら机を並べての作業が可能であることも明らかになった。冷暖房機もあるので室温調整もできる。さらに茶室は，飲食可能で，花も入れられる。つまり展示場のある館内ではできなかったことができる唯一の屋内でもある。この点だけでも，イベントの幅が広がる。様々な体験イベントなどにも充分利用しうる設備であることを考えると，少人数で飲み物を飲みながらの座談会式の講義や，鑑賞方法の指南と実践，小中学生を対象としたおもちゃ作りなど，黎明館で扱われる様々な分野にも対応したイベントの会場として，利用が可能であると考えられる。

（４）黎明館におけるワークショップの需要と課題

今回のワークショップの実践から，ワークショップは，必ずしも子供のみにある需要ではないということが分かった。きっかけはもちろん薩摩焼やお茶，茶室というテーマが関心をさそったところだが，実際にお菓子を使っての表現活動において大人も子供も楽しんで取り組めたところを見

ると，ワークショップそのものは，生涯学習へのアプローチとして，充分に成り立つのである。また，アンケートの中には，「黎明館はただ静かに鑑賞するだけだったので，こういうワークショップがあるのはいいことだ」との意見もあった。鑑賞から学びに進んだことを参加者が実感できたことは，生涯学習へのアプローチが成功しているといえる。さらに「今までずっと黎明館ではこういったものはなかったわよね」という声もあった。黎明館での体験的活動を期待していた方もいると分かったことは大きい。

しかし，ワークショップを事業として定着させるためには様々な課題も発生する。どのくらいの頻度で実施するか，特別展の関連事業として実施するのか，他にも企画内容や開催時期など，定期的に開催するには，現状の把握と課題の整理が必要である。

おわりに

黎明館は，展示解説，学芸講座，古文書講座，講演会など，一年の間に多くのイベントを開催している。しかし，講義型とともに，実際に体験する参加型の需要を発見することができた。子供向けの体験講座を，今後も継続することはもちろんだが，大人が参加し，学べる機会を作っていくことも，黎明館の事業として考えていく必要がある。

今まで培った知識や経験を生かし，新たな学びへとつなげる機会を作るために，様々な事業を，様々な視点から見て実践していくことが，重要な鍵となると考える。

謝辞

今回，鹿児島大学教育学部美術科３・４年生，教育学部留学生，教育学研究科芸術・スポーツ系学修コース大学院生の皆様に，試作や当日の運営などで多大なご協力を賜り，無事にワークショップを遂行できました。皆様の丁寧な御対応は，参加者にも大変好評でした。ここに御芳名を記し，感謝の意を表します（所属別五十音順，敬称略）。

【鹿児島大学教育学部美術科】

川井田　健斗

俣木　毬桃

【留学生】

賈　若

趙　陽

練　書静

【鹿児島大学大学院教育学研究科】

加治木　彩音

福留　春菜

堀之内　聖

なお，薩摩焼の茶碗は裏千家青年部と鵜木すみ子氏，中別府佐世子氏よりお借りし，抹茶は，中村宗浩氏に点てていただいた。また，床の間の生け花は，池坊師範の鵜木氏によるものである。なお，菓子は，明石屋の「今月のお菓子（睦月）」より６種の上生菓子を使い，ワークショップでの使用と公表について許可いただいた。

参考文献

富士川金二著『改訂増補博物館学』（成文堂，1971年）

（かしき　めい　本館学芸課資料調査編集員）